

初詣の実態研究序論

―戦後の神社神道の変容の解明に向けて―

文化庁宗務課専門職員

石井 研 士

はじめに

警察庁発表によると、昭和六十三年の三ヶ日の初詣者数は七、九三七万人であった。昨年（七、六三四万人を三〇三万人上回る人出である。新聞記事によれば、三ヶ日が好天に恵まれたためであろうという。この警察庁発表の全国の初詣者数は、一月四日に新聞紙上やテレビで報道され、毎年の事ながら、なんと多くの日本人が初詣に出かけるのだろうと考えさせられることになる。一人が複数の神社や仏閣に参ることを無視すると、実に日本人の三人に二人が初詣に出かけていることになる。正月は、平生と異なり、日本人が著しく宗教的になる時間であつて、その具体的な行為として初詣を考えることができる。（次頁表参照）

この八、〇〇〇万人に昇る数は、他国と比較して、宗教性が低いとされる日本人が日常生活の中ではさまざまな宗教的行為を行っている証のひとつとして考えられている。図（五十一頁）から明らかのように、「信仰を持つ」という点では、日本人はアメリカ人と比較して圧倒的に割合が低いものの、初詣という行為に関しては、およそ八割の日本人が「する」と回答している。

昭和六十三年三ヶ月初詣者数（警察庁調べ・50万人以上）

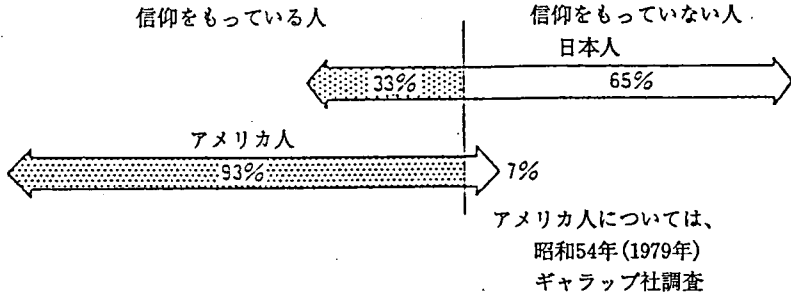
神社・仏閣の人出状況
(50万人以上)

順位	都道府県	神社・仏閣	人出
1	東京	明治神宮	399万人
2	神奈川	川崎大師	344万人
3	千葉	成田山新勝寺	316万人
4	大阪	住吉大社	289万人
5	京都	伏見稲荷大社	238万人
6	愛知	熱田神宮	227万人
7	神奈川	鶴岡八幡宮	196万人
8	福岡	太宰府天満宮	180万人
9	東京	浅草寺	170万人
10	埼玉	大宮氷川神社	159万人
11	愛知	豊川稲荷	119万人
12	京都	八坂神社	108万人
13	三重	伊勢神宮	94万人
14	兵庫	生田神社	85万人
14	兵庫	湊川神社	85万人
16	兵庫	長田神社	79万人
17	東京	西新井大師	75万人
18	北海道	北海道神宮	71万人
19	岐阜	伊奈波神社	57万人
20	奈良	春日大社	56万人
21	島根	出雲大社	53万人
22	奈良	大神神社	52万人
22	佐賀	祐徳稲荷神社	52万人
22	福岡	筥崎宮	52万人

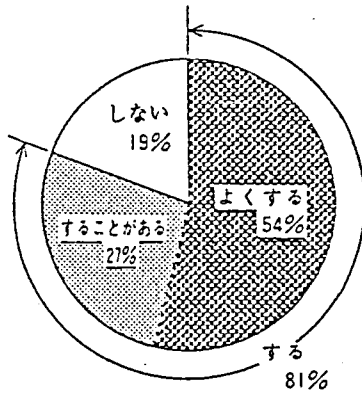
こうしたことから、日本人の宗教回帰を高らかに謳い上げた「日本人の宗教意識」(NHK放送世論調査所編、昭和五十九年)では、第一級の国民的行動としての「墓参り」と並んで、初詣は「日本人の『全国民的な行事』」とされているのである。⁽¹⁾しかしながら、「日本人の『全国民的な行事』」と評されているにも関わらず、初詣に関する具体的な調査や研究は皆無に近いといつてよい。⁽²⁾我々は、新聞紙上の初詣者数や無作為抽出による調査結果の数字に依存しながら、日本人の宗教性を論じているにすぎない。

本論文の目的は、神社への初詣の実態を把握することによって、神社神道の変容を考察することにある。とくに、東京における初詣の実態ならびに戦後から現在までの初詣者数の変化を分析することによって、戦後の都市化が神社

〈信仰の宿無〉
—日米の比較—



〈初詣で〉



神道に与えた影響を考察したいと考えているが、紙数の都合と分析の順序のため、本論はそのための序論をなすものである。戦後から現在までの四十年余の間に、東京はすさまじい勢いで変化し、今また高度情報化社会を体現すべく新たな変貌を繰り返そうとしている。こうしたメガロポリス東京において、神社はどのような変化・対応を迫られ、また、どのように対処してきたのであろうか。その結果、神社神道の現状は、かつての姿と比較してどのような状態にあるのか。こうした疑問を初詣という具体的な事例から明らかにすることが、本論の直接の目的である。³⁾

宗教学の巨人岸本英夫は、いち早く都市化が神社神道に与える影響を指摘している。岸本によれば、「神社神道にとって、都市化への直面ということは、日本の仏教やキリスト教の場合とくらべて、遥かに重大な問題」であり、神社神道の基本的な本質に係わる問題である。それは神社神道が、農耕的伝統に深く根ざした日本の農村の土壌に育ち、自然との調和を重んじる日本の伝統的文化と密接に関係があるためである。しかしながら、こうした神社神道は都市化の影響を受け、従来の神社の基盤は危機にさらされている。それは氏子組織の崩壊あるいは氏子意識の希薄化となつて現われている。岸本は、大都市における人口の移動性の高さゆえに、「地縁」または「血縁」の意識が弱まり、都民と神社の紐帯が弱化するることによつて氏子組織の崩壊が始まっていると指摘している。氏子組織や氏子意識の崩壊は、ある程度神社界でも共通の認識にあるものと考えるが、こうした神社を支える基盤の大変動は、かなりの程度、初詣者数の変化に反映されているように思われるのである。

東京都の初詣の実態を分析するに当たつて、まず、この七、九三七万人という数字が、どのようにして算出されるか、この数字から我々は何を知ることができるかを考えたいと思う。

七、九三七万人という数字

警察庁では昭和四十五年から全国の初詣者数を公表している。まず、どの様に初詣者数が算出されるかを見てみよ

う。集計の仕方には以下の三種類がある。

一、カウンター利用による全員集計算出

神社仏閣の入口すべてに警察官を配置し、カウンターを用いて人数を数える。

二、入場制限による算出

ロープなどで入場者を制限し、一回につき何人、何回という形で人数を数える。

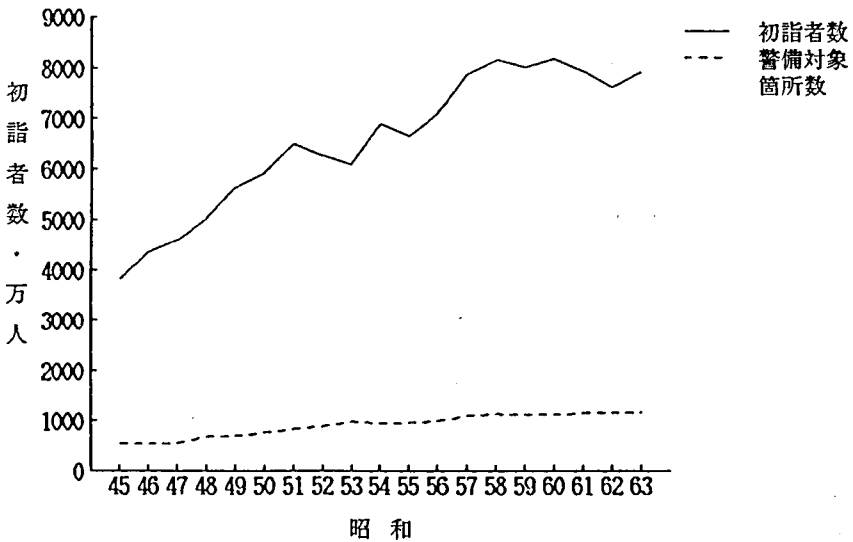
三、単位面積による算出

たとえば、一平米あたり何人というように数え、収容面積をかける。

警察庁によれば、各担当警察が、雑踏警備の対象となるそれぞれの神社仏閣に応じて、最も混乱を招かない形式を取って算出しているという。このようにして各警察署が集計を行い、それを各都道府県の県警察本部に報告し、最終的に警察庁保安部外勤課でとりまとめた数値が、我々の知る全国の初詣者数となる。五〇万人以上の参拝者のある神社に関しては、神社仏閣名までが警察庁に報告される。

このように、毎年発表される初詣者数は、各県各警察署担当の雑踏警備対象箇所において算出された初詣者数の合計なのである。つまり、昭和六十二年では、雑踏警備対象箇所は一、一五三箇所、初詣者数の合計は七、六三四人となり、昭和六十三年では一、一七五箇所、初詣者数の合計が七、九三七万人となるのである。以下に昭和四十五年からの雑踏警備対象箇所と公表された初詣者数の増減をグラフ(次頁)にして示しておく。⁽⁵⁾

要するに、警察庁から発表になり、新聞紙上で我々が知り、全国の初詣者数と思っている全国の初詣者数は、ただか一、一〇〇余に過ぎない神社仏閣の初詣者数の合計なのである。もちろん雑踏警備による算出であるから、各県で参拝者の多い寺社は当然含まれているとしても、全国の八万余の神社、あるいは八万弱の寺院の存在を考慮すれば、ここでの一、一〇〇という数は余りにも少ない。とくに、村の氏神のようなものは排除されており、全体として

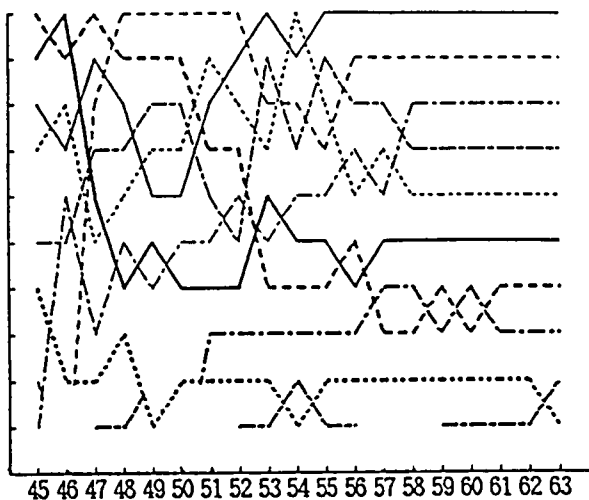


見た場合、初詣者数の合計は数億に達するのではないかと考えられる。以上のように、警察庁発表の初詣者数は、全国の初詣者数の実態を把握するためには、かなりの程度あやしいものとなっている。つまり雑踏警備の対象箇所の増減によって、公表される初詣者数も変わってくることになるのである。

次に、警察庁によって発表された昭和四十五年からの、初詣者数ベスト一〇を見てみることにしよう。次表(五十五頁)は初詣者数の多い少ないとは無関係に、各社寺の年毎の初詣者数の順位を線で結んだものである。(6)

一見して分かるように、グラフのちよと半ばまでは、図形にかなりの乱れが見られる。これは、年毎によって、社寺の順位が目まぐるしく変化していることを示している。ところが、昭和五十年代の半ばから、次第に図形は安定し始め、最近の六年間ほどは、とくに上位六社寺の順序はまったく変わっていない。また昭和六十三年の初詣者数に従えば、一〇のうち八つまでが神社である(五〇万人以上の参拝者の社寺の場合

順位



- 明治神宮
- - - 川崎大師
- · - 成田山新勝寺
- 住吉大社
- · — 伏見稲荷大社
- 熱田神宮
- - - 鶴岡八幡宮
- · - 太宰府天満宮
- 浅草寺
- 豊川稲荷

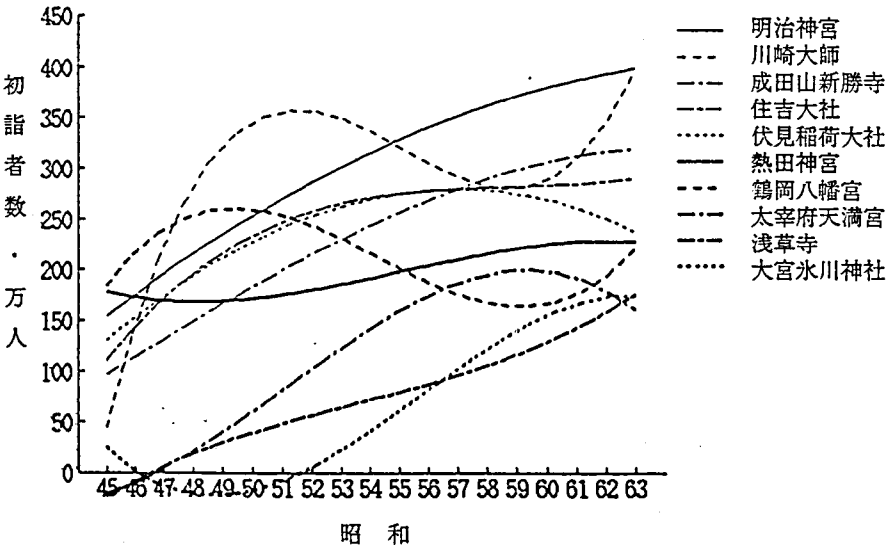
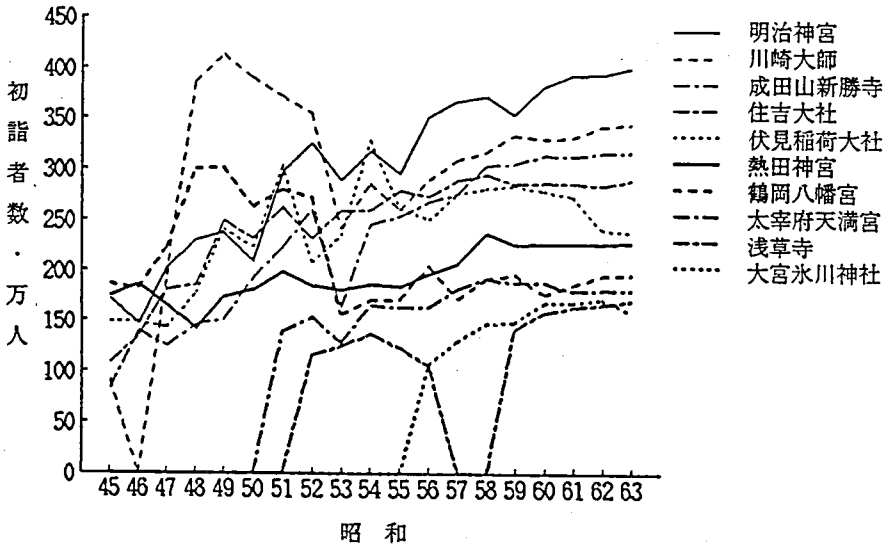
昭和

では二四社寺のうち一九社⁽⁷⁾。

それでは、現在上位ベスト一〇を占める社寺の初詣者数の変化はどうなっているのだろうか。次頁上のグラフは実数を折れ線グラフに表したものの、下のグラフは三次曲線化することによって変化を滑らかにとらえたものである。グラフから明らかのように、どの社寺も順調に初詣者数を伸ばしている（太宰府天満宮が近年減少の傾向にあるように見えるのは、データが昭和五十年からであり、昭和五十七年、五十八年は一〇位に入っていないためであって、実数は増加している）。

県別にみた社寺の重なり具合はどうだろうか。昭和六十三年のベスト一〇によれば、東京と神奈川県が、それぞれ明治神宮と浅草寺、川崎大師と鶴岡八幡宮の二箇所を有しているが、仏教寺院の浅草寺と川崎大師を除けば、どの県も初詣の神社が重複していることはない。五〇万人以上の神社・仏閣の場合を見ても（五十頁参照）、一都道府県に五〇万人以上の初詣者数のある神社が複数存在する県は、京都、福岡、奈良の三府

図
5
1



県しかない。ここに、各県における特定の神社への初詣者の集中をうかがうことができる。

岸本英夫は、明治神宮への初詣者数の増加を見て一社集中を指摘している。⁽⁸⁾ 岸本の指摘はたんに明治神宮という東京の一社に限定されているが、この傾向は、毎年初詣者数の上位にランクされる神社の所在県すべてに共通して見いだせる傾向なのである。この点を神社本庁発行の月刊『若木』に掲載されている「全国著名神社初詣者数調査」から明らかにしてみよう。

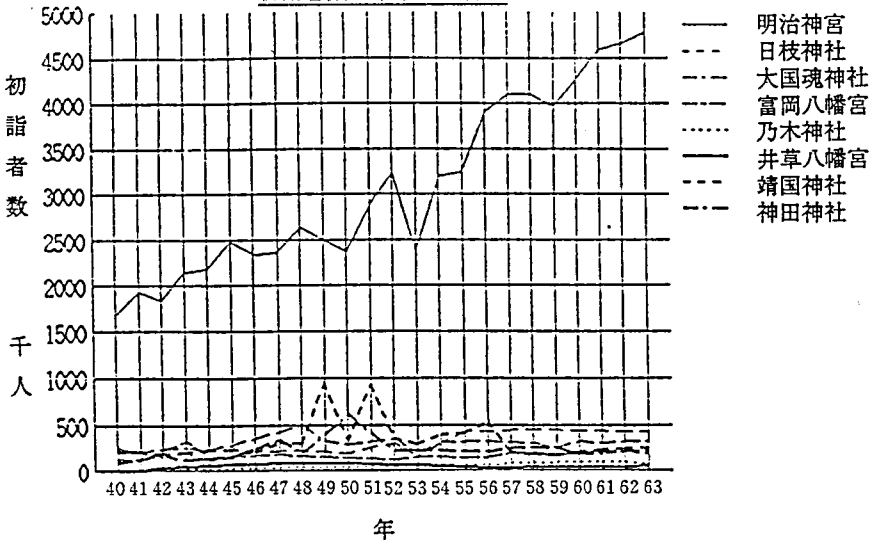
神社本庁の別表神社初詣者数

「全国著名神社初詣者数調査」は、昭和三十七年から毎年行われている。その年の三月号の『若木』に調査結果が報告されている。この調査は、昭和六十三年の調査報告に従えば、別表神社三三九および神宮（内宮・外宮）その他二社につき、三ヶ日の初詣者数・天候・概況報告欄の調査項目を設けた往復ハガキによって調査を依頼したもので、昭和六十三年は三〇六社から有効回答を得ている。回収率は八九%となっている。

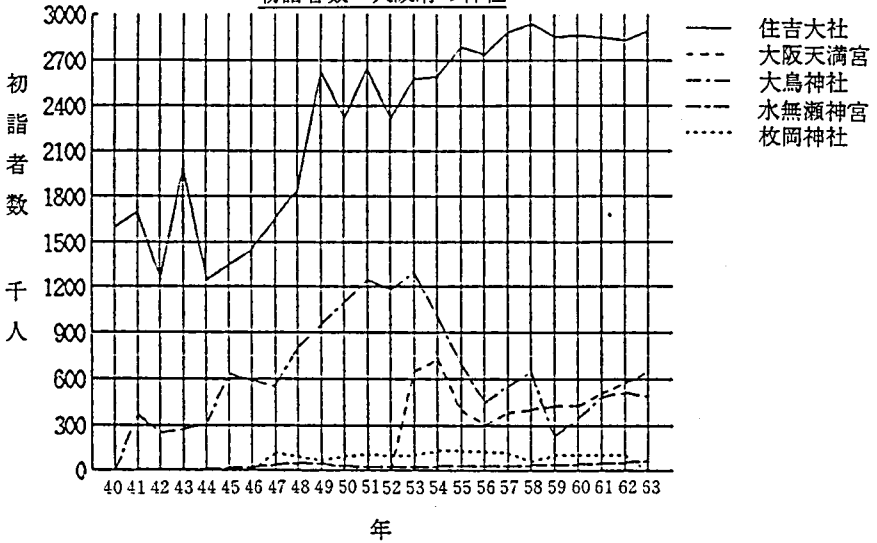
報告は依頼を受けた各神社の自主的な回答に任されており、各神社の報告による数値を見ても、端数をすべて切り捨てた概数と思われるものから、一の位まで記入してあるものまでさまざまである。神社にとってきわめて忙しい時期である正月の三ヶ日に、正確な初詣者数を神社に期待することは困難であり、報告される数値にまったく精度と信頼を置くわけにはいかないが、他に代わる資料が存在しないため、資料の不均一性と精度の低さを承知の上で採用したいと思う。

警察庁発表の昭和六十三年の初詣者数ベスト一〇のなかで、初詣者数の多かった神社の所在都道府県順に、「全国著名神社初詣者数調査」をグラフ化したのが次頁以下である。⁽¹⁰⁾（月刊『若木』昭和四十年―昭和六十三年より）

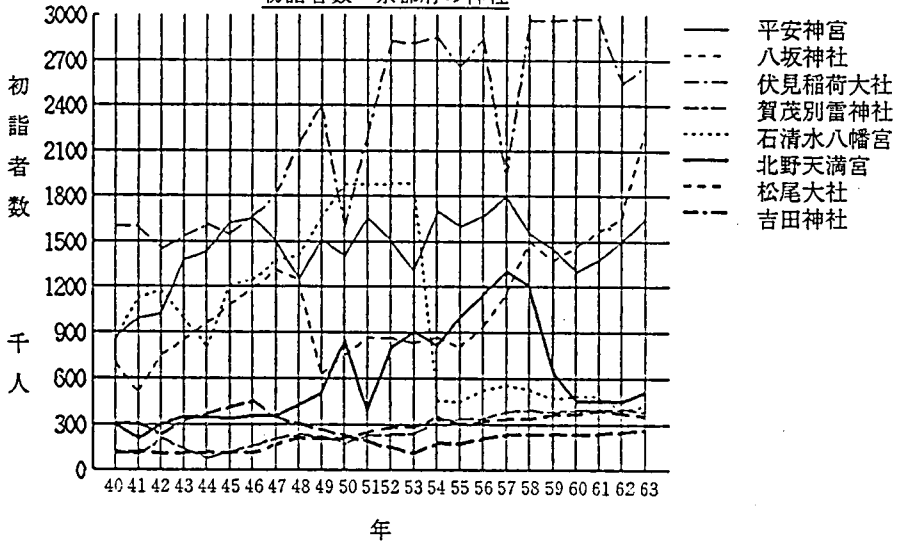
初詣者数 東京都の神社



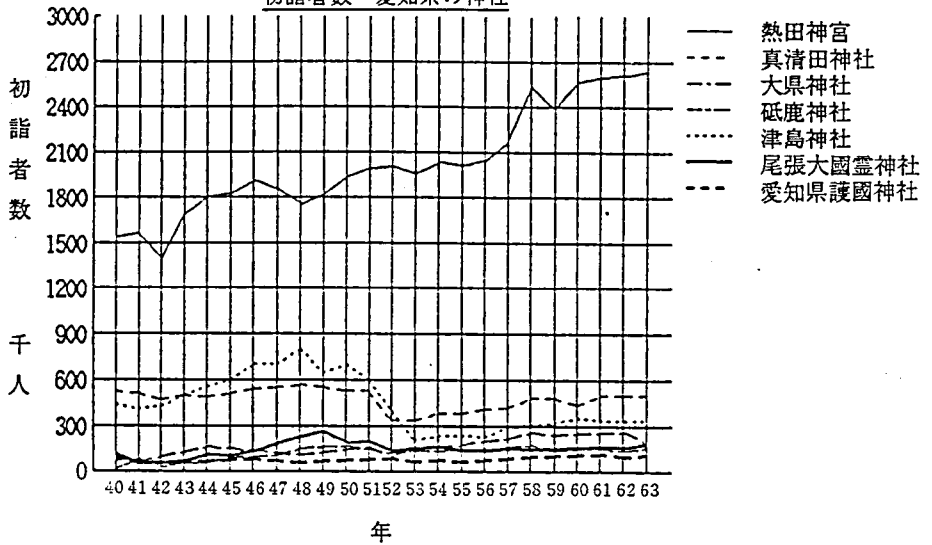
初詣者数 大阪府の神社



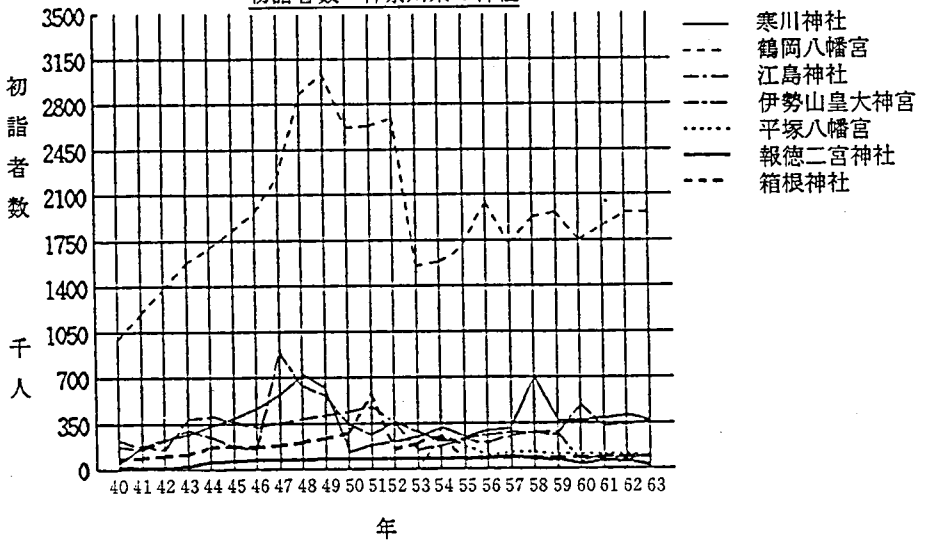
初詣者数 京都府の神社



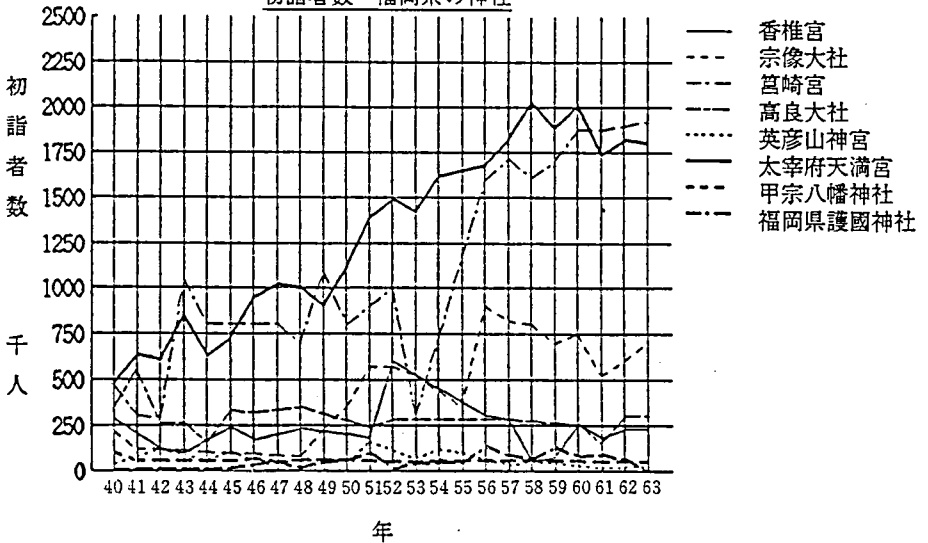
初詣者数 愛知県の神社

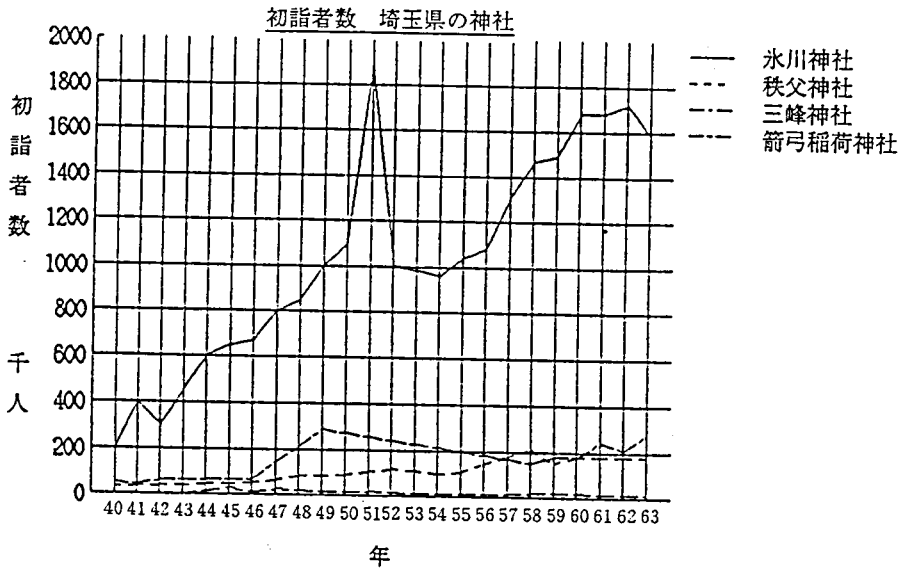


初詣者数 神奈川県的神社



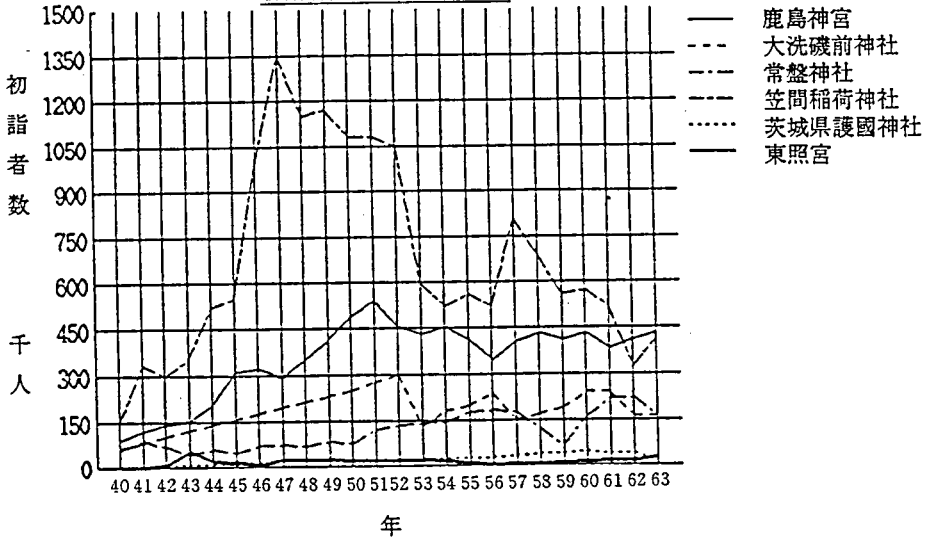
初詣者数 福岡県的神社



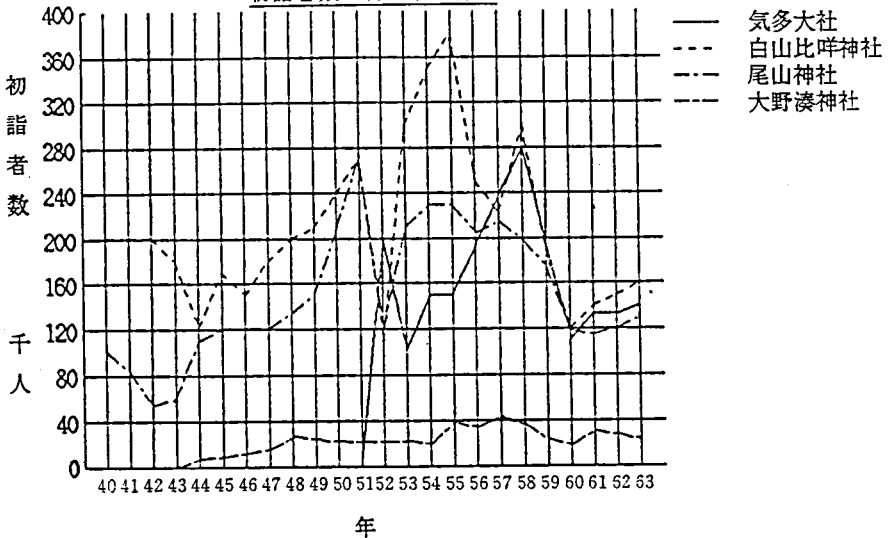


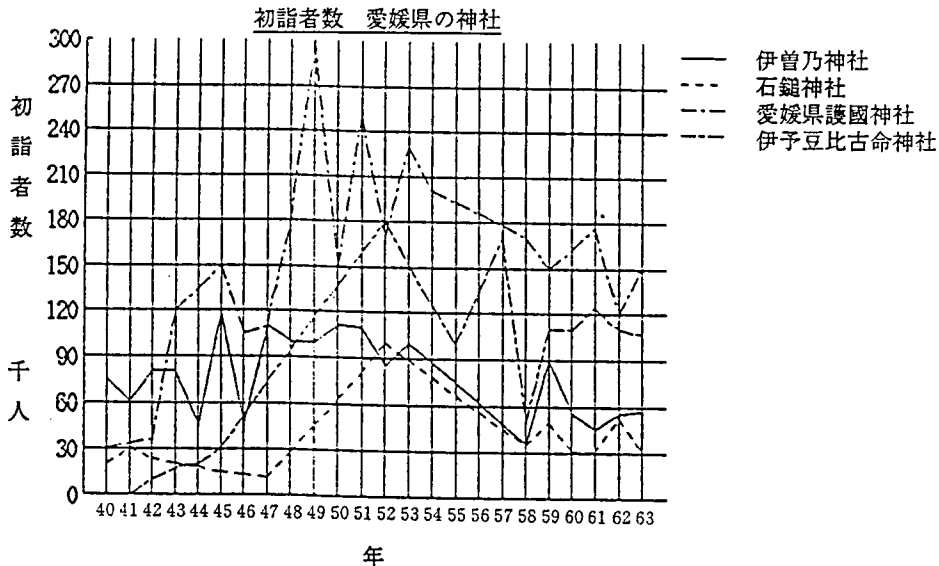
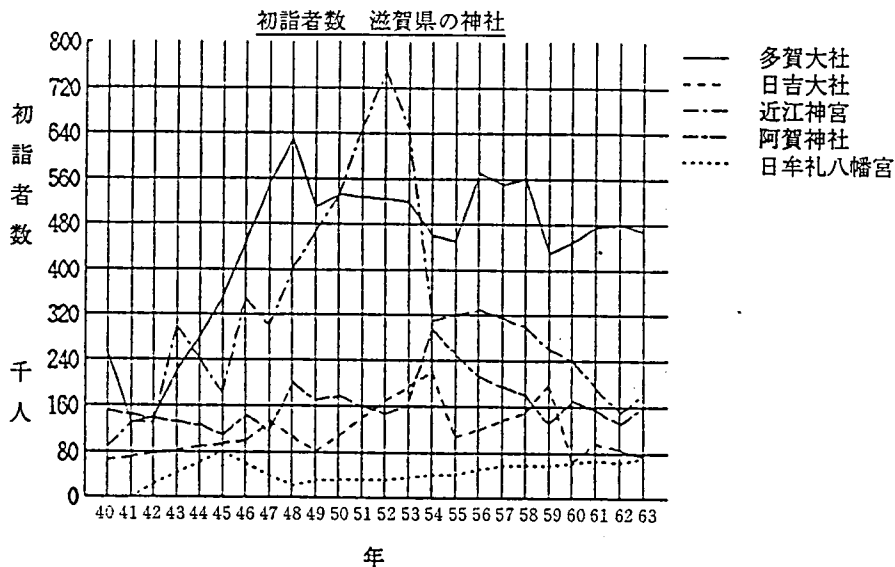
どのグラフも似た図形を描いていることがわかる。各県
 の特定の神社一社（京都の場合は二社）が初詣者数を増加
 させているのであって、どの神社も一様に初詣者を増やし
 ているわけではない。毎年初詣者数のベスト一〇に載るよ
 うな神社は、今後とも初詣者数を増加させていくかも知れ
 ない。しかしながら、その一方で、多くの中規模小規模の
 神社は初詣者数を減らしているのが実態なのではないか。
 次に、減少の著しい県を列挙してみよう。

初詣者数 茨城県の神社



初詣者数 石川県の神社





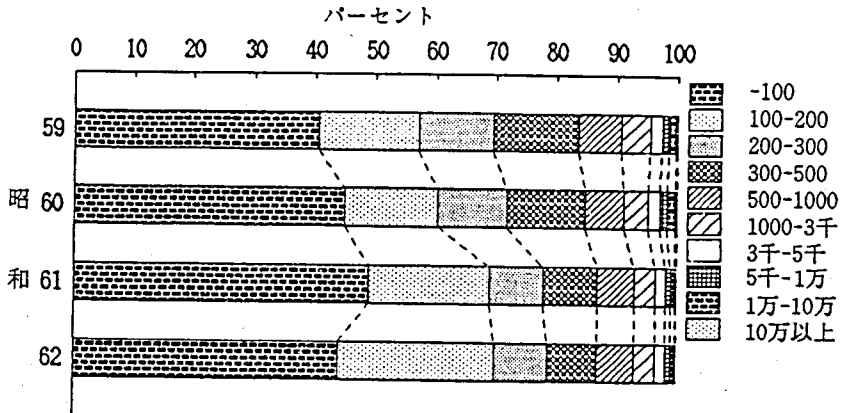
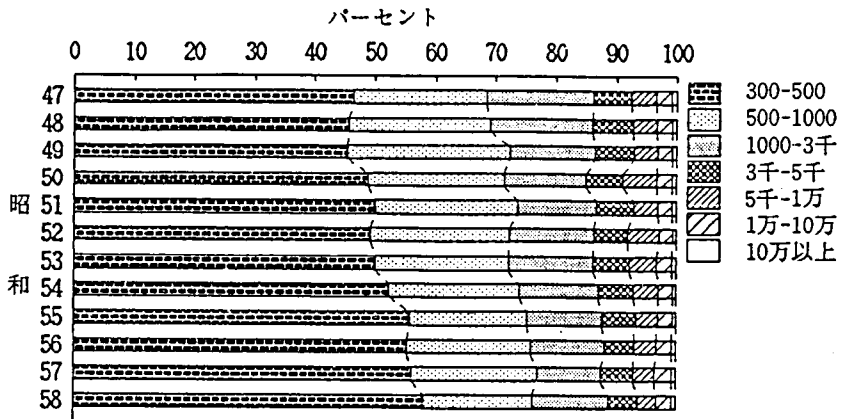
昭和35・38年	昭和39・42年	昭和43・45年	昭和46年	昭和47・58年	昭和59・62年
					100人未満
					100人以上
					200人未満
					200人以上
					300人未満
				300人以上	300人以上
				500人未満	500人未満
		300人以上	300人以上	500人以上	500人以上
		1000人未満	1000人未満	1000人未満	1000人未満
	1000人以上	1000人以上	1000人以上	1000人以上	1000人以上
	3000人未満	3000人未満	3000人未満	3000人未満	3000人未満
				3000人以上	3000人以上
				5000人未満	5000人未満
	3000人以上	3000人以上	3000人以上	5000人以上	5000人以上
	1万人未満	1万人未満	1万人未満	1万人未満	1万人未満
	1万人以上	1万人以上	1万人以上	1万人以上	1万人以上
				10万人未満	10万人未満
				10万人以上	10万人以上

おおよそどのケースも、昭和四十年代の後半から五十年代初めをピークに急速に初詣者数を減少させている。数の上からは、こうした傾向を示す都道府県の方が多し。

神社活動に関する全国統計から

全国規模での初詣の実態を知る上で、いま一つ参考となるものに、「神社活動に関する全国統計」がある。これは神社本庁から出される月刊「若木」の付録である。「祭典活動の状況」、「教化活動の状況」、「教育および福祉事業施設の経営状況」、「教育および福祉事業役職の兼任状況」の大項目とともに、「参詣・授与の状況」の項目がある。この全国統計は昭和二十九年から行われ、結果が報告されているが、初詣に関する統計が掲載されるのは、昭和三十三年からである⁽¹⁾。

しかしながら、初詣者の分類の基準自体はしだいに細分化しており、昭和三十三年と昭和六十二年をすぐに比較することはできない。昭和三十三年と三十四年の初詣の項目は、「初詣（新正月三ヶ日）参詣一万人以上の神社数」と「初詣（旧正月三ヶ日）参詣一万人以上の神社数」となっ



ており、当時の初詣の状況をうかがうことができるものの、データとしては限られた数字となっている。⁽¹²⁾ 昭和三十五年から旧正月の項目がなくなり、初詣の分類は「三千人以上一万人以下」「二万人以上」となり、以下項目はしだいに細分化され、それまで含まれなかった範囲も取り込まれていくようになる。初詣者数の分類とカバーする範囲の変化は前頁のようになっている。⁽¹³⁾

同じ領域を扱っている昭和四十七年から五十八年を比較することによって、どの範囲に神社が偏って行くかを見たのが上図である。

一見して明らかのように、

「三〇〇人以上五〇〇人未満」「五〇〇人以上千人未満」といった、初詣者数のきわめてわずかな神社が増加し、「五千人以上二万人未満」「二万人以上二〇万人未満」「二〇万人以上」という初詣者数の多い神社は、その占める割合を減少させている。この傾向は昭和五十九年以降より明確に現れている。昭和五十九年以降は、初詣者の区分上、全ての神社がどこかの領域に含まれることになる。調査対象の神社数も、昭和五十九年六四、二七三社、昭和六十年六八、九一四社、昭和六十一年七九、二二二社、昭和六十二年七九、一九一社というように、しだいに網羅的になっていく。

この図から判断すると、「二〇〇人未満」と「二〇〇人以上二〇〇人未満」の項目に不規則な増減がみられるものの、二〇〇人未満の神社が著しく増加し、一万人を越えるような神社はほんのごく一握りの神社であることがよく分かる。

いま一度ここで、上記の二つの統計から明かになった点をまとめておくと、次のような結論を出すことが出来ると思われる。第一には、初詣者数の増加は一部の特定神社への初詣者の集中という現象によってもたらされているということ。この傾向は大都市を持つ都道府県に顕著である。第二には、その一方で、全体に占める初詣者数の少ない神社の割合が増加しているということである。

全国の神社の初詣者数の動態分析

全国におよぶ神社の動態を一度に説明してしまうのはあまりに危険であるが、危険を承知の上で、全体の動向を概観し分析して見たいと思う。⁽¹⁴⁾

なぜ、神社によって初詣者数は増加したり減少したりするのだろうか。初詣者数を増減させる要因は何だろうか。

いま一度「全国著名神社初詣者数調査」を用いて考察してみよう。ただし、「全国著名神社初詣者数調査」に記載さ

れる神社は、別表神社や伊勢神宮などの大神社であつて、過疎地にある村の神社の動態を把握することはできない。

初詣者数の増減は、神社外的要因と神社内的要因の二つに分けて考えることができるように思われる。神社外的要因は、さらに二つのサブ・カテゴリー、つまり、地理的立地的要因と社会的要因に分けて考えることができる。また、神社内的要因も、神社の空間構成・規模的要因と人的要因の二つに分けて考えることができるように思われる。神社外的要因

—— 地理的・立地的要因 ——

分析を始める以前には、初詣者数の増減を決定するもつとも重大な要因は、人口動態であると考えていた。岸本英夫も、明治神宮への初詣者数の集中は人口移動の高さによると考えている。確かに人口動態による影響はみてとれるものの、それ以外の要因も絡み合い、事實は複雑な様相を呈している。同じ都道府県に位置しているながらも、初詣者数の規模、増減には様々なパターンを見ることができるのである。

すでにみたように、都市部に位置する特定の神社に初詣が集中していく傾向を指摘することができる。こうした事例のもつとも顕著なものは東京都の事例であろう。図から明らかなように、明治神宮への初詣者数と他の神社の初詣者数との差は、昭和四十年当時と比較して開く一方である。人口の増大にともなう一社集中は、同時に他の多くの神社の初詣者数の減少もしくは横ばいを意味している。人口の増大は必然的に各神社への初詣者数の増加をもたらしなさい。人口移動の激しさは、地縁による初詣を崩壊させ、人々を特定の有名ブランド神社へと追いやることになる。この点に関しては後述する。

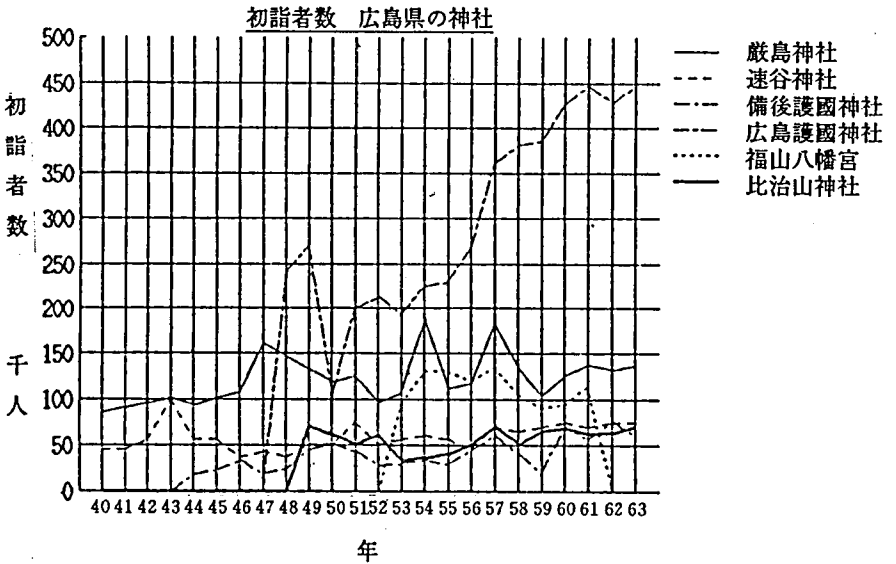
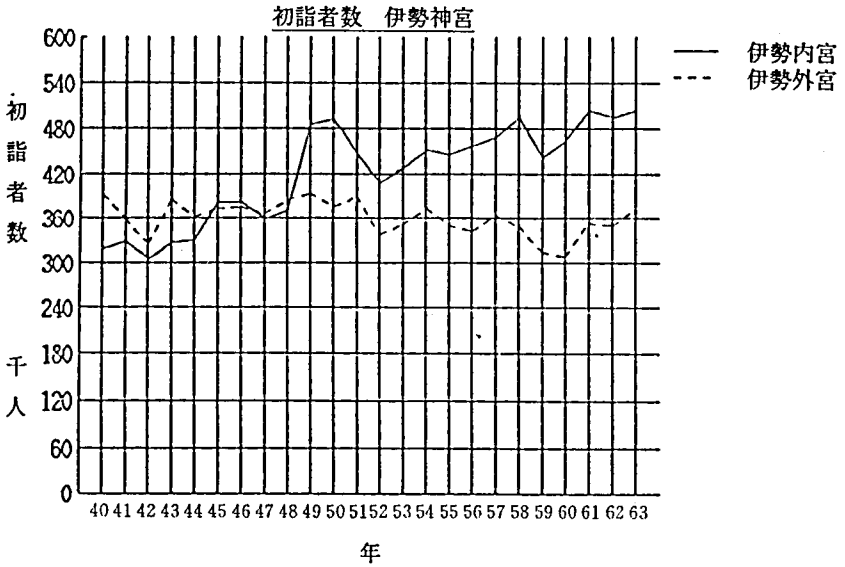
これとは逆に、人口規模や増減とは関係なく、近年の交通手段の発達、とくに車での初詣の増加にともなつて、駐車場の完備により初詣者数を増加させている事例も見られる。千葉県の安房神社は、車で初日の出を見ることを兼ねて初詣に来るものが増加しているという。熊本県の阿蘇神社も同様の傾向にある。

この点で注目しておきたい変化は、伊勢神宮の内宮と外宮の参拝者の増減である。内宮と外宮の宗教的空間の構成の相違等とともに、交通網の発達や観光ルート化は、両宮の初詣者数の増減に大きな影響を与えたものと考えられることができる。

立地条件における顕著な現象として、いくつかの県において、護国神社の初詣者数が増大している現象をあげることができる。広島県、富山県、秋田県、山形県の各護国神社は、立地条件に恵まれて初詣者数を伸ばしているものと考えることができる。護国神社は、一般的に、戦前戦中に、町中に広いスペースを確保することができなかったために、町外れに設けられることが多かった。戦後、都市化にともなって、市街区域が膨張し、護国神社が市内に飲み込まれることになった。その結果、護国神社は市街区域内部に広大な境内と緑を提供するようになり、歴史的経緯とは無関係に、多くの初詣者を集めることになったと考えられるのである。

—— 社会的要因 ——

社会経済的要因が、初詣に対して直接間接にどのような影響を与えたかを知ることが容易ではない。事実関係を判断するための資料や調査報告は皆無と言ってよい。しかしながら、各都道府県の初詣者数のグラフが描く図形を見て行くと、似た図形の多いことに気が付くのである。つまり、昭和四十年代後半から五十年代初めにかけて、初詣者のピークを迎える神社が多いのである。この傾向は、現在も初詣者数を増やしている都市の大規模神社にも当てはめて考えることができる。それらの多くは、この時期に初詣者数を減少させ、以後増加の傾向をたどっているのである。当然ながらこの時期の大きな社会経済変動としてオイル・ショックを考えることができる。日本人の心性を数量化した分析によっても、日本人の心性がこの時期大きな変動を見ている。しかし、こうした社会変動を初詣者数の全般的現象に直接結び付けて説明するのは乱暴に過ぎるように思われる。分析を可能にするより詳細な資料の集積が必要である。



社内的要因

すでに護国神社については言及したが、護国神社の初詣者数が増加する傾向にある理由は、たんに地理的条件だけではない。護国神社は、広いスペースを有している場合が多く、神社の宗教的空間に欠くことのできない杜などの緑の機能、厳粛な雰囲気を作り出す参道、それらの向こう側にたたずむ社殿というように、清浄感と厳粛さを生み出す宗教的空間構造を持っている。とくに新年に神社に参拝する場合には、こうした清らかさや峻厳さが期待されているのではないだろうか。東京都の神社の中で明治神宮の初詣者数が急増しているのは故無しとしない。新年という聖なる時間に求められるのは、聖なる空間であり、東京においてそれを最も確に大規模に提供しているのが明治神宮と言うことになるのではないだろうか。

—— 人的要因 ——

いまひとつ重要な要因として考えられるのは、人的要因である。岩手県の盛岡八幡宮や三重県の椿大神社のように日頃の熱心な教化活動の成果が、初詣に現れたと考えられる事例がある。

以上危険を承知の上で述べた分析は、上述したように、詳細な調査によるものではなく、統計的な数値と神社本庁担当者の長年の経験に基づく経験的な知識を基盤としている。それゆえに、ここで述べられた結論が事実を正しく分析しているかどうかは、今後の研究の成果にまたねばならない。しかしながら、本論の最終目的である戦後の神社神道の変化を知るためには、十分示唆的な結論であると考えることが出来る。稿を改めて東京都の神社の初詣の実態を考察したいと思う。

- (1) N H K 放送世論調査所編「日本人の宗教意識」日本放送出版協会、昭和五十九年、六〇八頁。
- (2) 初詣が神道研究者や宗教研究者の間で、いかに関心の対象となっていないかは、最近刊行された次の著作を見てもうかがうことができる。「神道と現代 上下」(神道文化会創立四十周年記念出版委員会編、昭和六十二年)は、「神道と現代」をテーマに四十一名が執筆したものであるが、初詣に言及しているのは片山文彦氏一名に過ぎない(「都市化現象と神社の役割」)。しかも片山氏は「都民にとっての氏神さまである明治神宮への初詣」と述べているだけで、初詣の実態が問い直されているわけではない。また、神社本庁教学研究室が六〇年度と六一年度の二年間にわたって行った「現代社会と神社」の報告書「第四回神社本庁教学研究大会報告 主題「現代社会と神社」(神社本庁教学研究室、昭和六十二年)、「第五回神社本庁教学研究大会報告 主題「現代社会と神社神道」(神社本庁教学研究室、昭和六十三年)においても、氏子離れの指摘はあっても、初詣に関する言及はみられない。
- (3) 調査対象は異なるが、同様のテーマで拙論「都市化と神社―銀座八官神社の事例から―」(「神道宗教」第一三〇号、昭和六十三年)がある。
- (4) 「神道の都市化」(岸本英夫著「岸本英夫集 戦後の宗教と社会」(脇本平也・柳川啓一編集、昭和五十一年、溪声社)一六九頁。
- (5) 実数は次頁の表のようになっている。

	初詣者数 (万人)	雑踏警備対象 箇所数
45年	3825	538
46年	4370	538
47年	4590	551
48年	5024	670
49年	5625	697
50年	5905	759
51年	6484	846
52年	6247	893
53年	6080	979
54年	6880	953
55年	6640	967
56年	7100	1001
57年	7870	1108
58年	8160	1147
59年	8020	1121
60年	8175	1122
61年	7950	1153
62年	7634	1153
63年	7937	1175

(6) すでに述べたように、各警察本部からは、五〇万人以上の初詣者数のあった社寺はすべて名前まで報告されるので、本来その数は十に限定されない。ただし、昭和六十三年は五〇万人以上の初詣者数のあった社寺すべてをあげておいた。

(五十頁表参照)

(万人)

順位	45年		46年		47年	
1	鶴岡八幡宮	186	熱田神宮	185	鶴岡八幡宮	222
2	熱田神宮	175	鶴岡八幡宮	182	明治神宮	202
3	明治神宮	171	伏見稲荷大社	148	川崎大師	194
4	伏見稲荷大社	148	明治神宮	145	住吉大社	181
5	八坂神社	112	成田山新勝寺	138	熱田神宮	165
6	住吉大社	109	住吉大社	134	伏見稲荷大社	143
7	豊川稲荷	99	八坂神社	116	春日大社	135
8	伊勢神宮	93	榎原神宮	105	成田山新勝寺	125
9	川崎大師	91	豊川稲荷	103	豊川稲荷	103
10	成田山新勝寺	83	出雲大社	98	浅草寺	87

順位	48年		49年		50年	
1	川崎大師	386	川崎大師	413	川崎大師	389
2	鶴岡八幡宮	299	鶴岡八幡宮	301	鶴岡八幡宮	262
3	明治神宮	230	住吉大社	249	住吉大社	231
4	住吉大社	185	伏見稲荷大社	241	伏見稲荷大社	223
5	伏見稲荷大社	177	明治神宮	237	明治神宮	208
6	成田山新勝寺	145	熱田神宮	174	成田山新勝寺	192
7	熱田神宮	141	成田山新勝寺	151	熱田神宮	180
8	豊川稲荷	131	生田神社	121	春日大社	176
9	春日大社	104	浅草寺	113	豊川稲荷	104
10	浅草寺	90	豊川稲荷	101	伊勢神宮	96

順位	51年		52年		53年	
1	川崎大師	371	川崎大師	354	明治神宮	288
2	伏見稲荷大社	308	明治神宮	324	住吉大社	258
3	明治神宮	295	伏見稲荷大社	297	川崎大師	241
4	鶴岡八幡宮	279	鶴岡八幡宮	271	伏見稲荷大社	234
5	住吉大社	262	成田山新勝寺	259	熱田神宮	180
6	成田山新勝寺	222	住吉大社	231	成田山新勝寺	163
7	熱田神宮	198	熱田神宮	184	鶴岡八幡宮	156
8	太宰府天満宮	139	太宰府天満宮	152	太宰府天満宮	127
9	豊川稲荷	119	豊川稲荷	129	豊川稲荷	127
10	春日大社	115	浅草寺	116	浅草寺	125

順位	54年		55年		56年	
1	伏見稲荷大社	327	明治神宮	294	明治神宮	350
2	明治神宮	316	住吉大社	278	川崎大師	289
3	川崎大師	285	伏見稲荷大社	260	住吉大社	273
4	住吉大社	259	川崎大師	259	成田山新勝寺	267
5	成田山新勝寺	245	成田山新勝寺	253	伏見稲荷大社	250
6	熱田神宮	185	熱田神宮	184	鶴岡八幡宮	204
7	鶴岡八幡宮	170	鶴岡八幡宮	171	熱田神宮	196
8	太宰府天満宮	165	太宰府天満宮	163	太宰府天満宮	164
9	浅草寺	136	豊川稲荷	124	豊川稲荷	133
10	豊川稲荷	131	浅草寺	123	浅草寺	108
					大宮氷川神社	108

順位	57年		58年		59年	
1	明治神宮	366	明治神宮	371	明治神宮	353
2	川崎大師	308	川崎大師	316	川崎大師	332
3	住吉大社	289	成田山新勝寺	303	成田山新勝寺	305
4	伏見稲荷大社	280	住吉大社	294	住吉大社	285
5	成田山新勝寺	275	伏見稲荷大社	281	伏見稲荷大社	283
6	熱田神宮	206	熱田神宮	236	熱田神宮	225
7	太宰府天満宮	182	太宰府天満宮	192	鶴岡八幡宮	196
8	鶴岡八幡宮	172	鶴岡八幡宮	192	太宰府天満宮	188
9	豊川稲荷	135	大宮氷川神社	147	大宮氷川神社	149
10	大宮氷川神社	130	八坂神社	136	浅草寺	142

順位	60年		61年		62年	
1	明治神宮	381	明治神宮	392	明治神宮	393
2	川崎大師	329	川崎大師	331	川崎大師	341
3	成田山新勝寺	313	成田山新勝寺	312	成田山新勝寺	315
4	住吉大社	286	住吉大社	285	住吉大社	283
5	伏見稲荷大社	278	伏見稲荷大社	273	伏見稲荷大社	241
6	熱田神宮	226	熱田神宮	226	熱田神宮	226
7	太宰府天満宮	188	鶴岡八幡宮	186	鶴岡八幡宮	195
8	鶴岡八幡宮	176	太宰府天満宮	180	太宰府天満宮	181
9	大宮氷川神社	168	大宮氷川神社	168	大宮氷川神社	172
10	浅草寺	159	浅草寺	164	浅草寺	167

(7) 正月の初詣に寺院よりも神社へ行く傾向は、大晦日から元旦にかけて放送されるNHK「ゆく年くる年」にも現れている。一例をあげれば、昭和六十二年暮れから六十三年元旦にかけての「ゆく年くる年」に映し出された社寺は、元旦まですべて寺院であり、元旦からはすべて神社であった。大晦日の除夜の鐘は寺院によってもたらされるが、「寺」が「死」のイメージと結び付く一方で、元旦の神社への初詣が誕生や生育などからの「生」をイメージさせるのではないかと思われる。そうであるとすれば、日本人は正月を境に死んでのち再生すると考えることもできる。

(8) 前掲書、八九〜九〇頁。

(9) 最も実態に近い数値は、伊勢神宮の内宮と外宮の初詣者数であるといわれる。伊勢神宮では、五十鈴川にかかる宇治橋のたもとでカウンターによって初詣者数を数えているという。

(10) 「全国著名神社初詣者数調査」は昭和三十七年から報告が記載されているが、調査として定着し、ほぼ毎年各神社のデータが揃うようになるのは昭和三十九年以降のことである。ここではグラフ作成の都合上、昭和四十一年のデータから採用した。また、変化を的確に把握するためにデータを三次曲線化したグラフを記載した。

(11) ただし、昭和三十七年の「神社活動に関する全国統計」には「初詣」の記載がない。

(12) 昭和三十三年と三十四年の記述は次表のようになっている。

	初詣（新正月三ヶ日） 参詣 一万人以上の神社数	初詣（旧正月三ヶ日） 参詣 一万人以上の神社数
昭和三十三年	五五六	一一四
昭和三十四年	六一六	一六〇

(13) 数値を次頁に年代毎に示しておく。

	-100	100	200	300	500	1000	3000	5000	1万	10万	合計
		-200	-300	-500	-1000	-3000	-5000	-1万	-10万	以上	
35年								1060		634	1,694
36年								888		631	1,519
38年								1122		537	1,659
39年						2630		1263		589	4,482
40年						2843		1410		568	4,821
41年						2430		994		493	3,917
42年						2806		1123		582	4,511
43年					6383	3205		1541		862	11,991
44年					7059	2728		1416		785	11,988
45年					7940	2373		1193		1109	12,615
46年					8385	2540		1192	564	107	12,224
47年				6138	2906	2340	834	540	348	112	13,218
48年				6897	3513	2554	1029	579	380	111	15,063
49年				7613	4503	2373	1079	645	400	114	16,727
50年				8400	3875	2335	1022	982	431	131	17,176
51年				9052	4277	2361	1124	710	443	127	18,094
52年				9568	4476	2707	1094	1017	430	130	19,422
53年				9277	4124	2605	1127	844	481	131	18,589
54年				10387	4309	2652	1144	815	486	133	19,926
55年				12104	4254	2713	1222	772	520	141	21,726
56年				12249	4553	2716	1072	782	557	156	22,085
57年				12371	4604	2363	1175	755	615	168	22,051
58年				14153	4446	3072	1190	732	608	166	24,367
59年	26092	10524	8054	9146	4592	3064	1260	744	631	166	64,273
60年	30962	10622	8028	8922	4475	2680	1344	808	898	175	68,914
61年	38591	15851	7179	7163	4760	2778	1364	747	610	169	79,212
62年	34654	20514	7017	6604	4801	2764	1324	738	598	177	79,191

(昭和37年はデータが欠如)

(14) 当然ながら、たんに「若木」に掲載された数値だけでは、以下の分析は不可能である。以下の分析に関しては、神社本庁の牽札仁、茂木貞純、大井鋼悦の三氏に協力を得た。記して感謝を申し上げたい。また、各県の分析は、拙論「神社初詣調査」(田丸徳善編「総合研究 A 研究成果報告書 現代日本における教団の総合調査」東京大学宗教学研究室昭和六十三年)参照。